保護者と協力する校内別室の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校３年生の５月まで登校していたが、６月に家庭環境が大きく変化し、その後、登校ができなくなっていた。保護者は、「本人が精神的に落ち着いてから登校すればよい」と考えている。子どもクリニックには保護者と一緒に通っている。

具体的な取組

○生徒や保護者との話合い

当該生徒の様子を保護者と共有し、無理にではなく、当該生徒が精神的に安定した時に登校することにした。

SC の意見も取り入れ、担任、教務主任、副校長等で支援会議を行った。

担任、教務主任が校内別室を紹介して担当につなげ、通室につながった。

○校内別室の利用

９ 月中旬から校内別室を利用し始め、ほぼ毎日登校している。当該生徒が登校した際の活動については、本人の意向を尊重し、無理せず過ごすことができるように心がけた。校内別室は個別ブースもあり、当該生徒が一番過ごしやすい場所を選択できるようにしている。

○給食は保健室で喫食

当該生徒は、給食を楽しみにしているため、その気持ちを尊重し、給食を食べてから下校することを提案した。教室に行くことが難しいため、保健室で養護教諭と一緒に食べている。

今のところ、午前中は登校し、給食を食べて下校している。

○寝ていても OK

不安感から眠れない日もあり、医者から睡眠導入剤を処方されている。眠気が急にくることがあるため、「疲れたら寝てもよい」というスタンスで、登校を促すことを第一目標にしている。

今のところ、学習したり、絵を描いたりする時間が多い。

成果

担任が校内別室に顔を出し、クラスの様子や学校の様子を伝えることで、修学旅行に行きたいという意欲が出てきた。事前学習にも参加できるようになり、クラスの友達と協力する姿も見られるようになった。

課題

目標ができたことで登校が意欲的になったが、不安定な部分が残るため、継続的に支援していくことが求められる。

不登校対応巡回教員による生徒支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校のときは５年生から休みが続いていた。中学校進学後、２か月ほどは登校できたものの、その後、再び学校に来られない日が続いていた。中学３年生になると、４月から校内別室ができると聞いて楽しみにしていた。修学旅行に行きたい、高校に進学したいという希望をもって進級した。

具体的な取組

○校内別室の設置

今年度から設置したため、様々なことが手探りの中、生徒のニーズに合わせてすぐに利用ができるように、環境やシステムの確立を急ピッチで進めた。生徒のペースに合わせ、その日にすることを確認しながら進めることで、利用する生徒の学校滞在時間が増えていった。

○支援会議への参加

校内委員会に参加し、校内別室の運営や生徒の対応について、情報交換をしている。他校の取組を紹介することもでき、よりよい対応につなげている。

○連絡会で得た情報を還元

連絡会で得た情報を還元することで、対応教職員のブラッシュアップを行っている。特に、チャレンジクラスの時間割や内容などが効果的な情報になっている。東京都教育委員会の取組についても早いタイミングで伝え、生徒へのよりよい対応につなげている。

○他機関との連携

生徒の様子をより知るために、教育支援センターやＳＣと定期的に情報交換をしている。また、ＳＳＷと連携することで、家庭との連携もスムースに行っている。「どこにもつながっていない生徒」の減少につながるようにしている。

成果

少しずつ取り組むことで生徒はペースをつかみ、教室に入ることができ、修学旅行にも参加できた。担任の声かけや友達のサポートも効果が大きかった。教職員が、研修を重ねたり視野を広げたりすることが、生徒にいい影響を与えることにつながった。

課題

校内別室では自習に加え、必要に応じてＳＳＴを取り入れ、当該生徒がコミュニケーションを図ることの必要性を感じるようにすることが課題と考える。

本人の興味・関心から始める不登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は、他者との距離感をつかむことが難しいという特徴があり、小学校１年生４月から特別支援教室を利用している。中学１年生の１学期は毎日登校していたが、家庭環境の変化から生活のペースを崩し、体調不良を訴え登校日が減った。

具体的な取組

○校内別室の利用

７月の面談で、担任や特別支援教室巡回指導教員から校内別室利用について話し、本人の「試してみたい」という意志が確認できたため、８月から利用を開始した。初めは登校が定着しなかったが、日を追うごとに登校日数が増え、最近は毎日登校できるようになった。

○全教職員による学習支援体制

支援員のみの学習支援ではなく、全教職員体制で教科担任制の時間割を組み、学習支援を行っている。特に、当該生徒が好きな実技教科は出席率が高く、意欲的に活動する姿が見られる。

○登校のきっかけ

本人が登校しやすいように、まずは「給食を食べに来る」ことを目標とした。その際も支援員だけではなく、他の教員も加わり、会話を交えながら食事ができるようにしている。

担任も給食時に顔を出し、プリントを渡したり、連絡事項を伝えたりするようにしている。

○他の生徒とは違う動線

興味のある教科（主に実技教科）から少しずつ教室（特別教室）に向かえるようになってきた。また、他の生徒と会う心構えができていないため、他の生徒と会わないように、別の階段を使い、動線を変えるなどの配慮をしている。

成果

少しずつ登校日数が増えてきた。給食の時間には、自分の話ができるようになるなど、リラックスしている様子が見られるようになった。また、単元テストを校内別室で受けるなど、学習にも意欲的に取り組むようになった。

課題

進路選択に向けて、学習時間を増やしていくことが課題である。また、少しずつ友達との関わりを増やしていく。